一般の部「知事賞」

秘密の話

野中（のなか）　紀子（のりこ）（愛媛県）

五年半前に脳梗塞を発症した夫には左半身片側麻痺という後遺症のほかに「高次脳機能障害」という難しい病名がついた。脳の神経がうまく働かないので理性のコントロールが苦手となりよく泣くしよく怒るようになった。それでも記憶の回路は鮮明で、楽しかったこと、嬉しかったこと、がんばったことなど思い出話に花を咲かせては不自由な身体ではあるが明るく前向きに生活していた。

ある時、今は亡き長兄が元気で帰省しているかのように語り、妻である私に自分の代わりに会いに行ってくれと頼む。しばらく兄の話が続いたかと思ったら、今度は年老いた両親がふたりで暮らしているので、お母さんの好きなスイカを買って届けてほしいと言う。夫の妄想に話を合わせては、兄のこと、両親のことをあたかも実在しているかのように話して夫を安堵させた。しかし夫の妄想はこれだけでは収まらなかった。

ある日夫が「おもしろい夢を見たぞ～」「どんな夢？」夫はニヤニヤしながら「君に子どもが出来たんじゃ」「え～！こんな七十過ぎたおばあちゃんに子どもが～？」内心驚きを隠せなかったが、その日を境に夫はことあるたびに「子どもは元気か？」「腹を冷やしたらいかんぞ」「走るな！転んだらどうするんぞ！」その様子はもはや夢の中の話ではない。現実に起こった嬉しい体験そのものに化けた。

「名前は桃子にするけんの！」夫の妄想はひとつひとつが現実味を帯びてくる。「命名札を用意しといてくれ。元気になったら自分が筆で書くけん」「赤飯を配る先をリストアップしとけよ」いつまでたっても膨らまない私のお腹をそっと撫でてみる夫。「動きよるか？」「あっ！今動いたよ！」夫は何とも言えない嬉しそうな笑顔を見せた。約六カ月夫は新しい命の誕生を待ちわびながら、七十八歳の誕生日前夜に静かに息を引き取った。夢と現実のはざまで確かに夫は最高の愛顔を残して永遠の旅路へひとり旅立った。

一般の部「特別賞」

空気に溺れる

丸林（まるばやし）　しょうこ（沖縄県）

「ご飯食べた？」「着替えてー」「急いでー」。朝はいつもドタバタだ。

7時半に家を出て、4歳の娘を保育園へ送り、大急ぎでフルタイムの仕事に向かう。

ある朝、その日常に異変が起こった。

「ご飯食べた？」「着替えてー」「急いでー」。いつも通り声をかける私の目からは涙がこぼれていた。わずかに驚いた表情を見せた娘が「ママどうしたの？」と訊く。誤魔化すためハグをしようとする私の手を、娘はサッと振り払い、私の目を真っ直ぐ見て、「ママ、なみだはね、おこってるか、かなしいか、こまってるかのどれかなんだよ」と言い、ピンとたてた小さな3本の指を私の顔の前に出して「ママはどれ？」と訊いてきた。

私はハッとした。

長引くコロナで、ピンと張りつめた会社の空気、保育園の登園自粛の空気、気分転換だった同僚とのランチは黙食。さらに、私のコロナの罹患により、復職後、廊下ですれ違いざまに話すことさえ憚られる空気。

私は、社会の空気に呑み込まれ、息ができなくなり、溺れそうで「困って」いたのだ。

おそらく保育園の先生が教えてくれたであろうこのシンプルな涙の理由に、私は肺に一気に空気が入り込むような感覚に見舞われた。

「お母さん、困っているみたい。」そう言うと「ママはこまってないてるんだね。」と娘。理由を知り満足した娘は、クルッと私に背を向け、鼻歌混じりに保育園の支度を再開した。私はその後ろ姿を見ながら、薄暗い曇り空のような視野が明るくひらけるのを感じた。

会社には休職を願い出た。

今、私は夏の強い日差しの中にいる。無邪気にはしゃぐ娘とひとときの休息の日々を過ごしている。先はまだ見えていない。でも大丈夫。キラキラと眩しい水平線、青く高い空、娘の屈託のない笑顔を見て、私は心からの愛顔でいられているのだ。

私は呼吸できている。

一般の部「優秀賞」

雨の日の焼きめし

松田（まつだ）　良弘（よしひろ）（大阪府）

幼い頃、私は雨が大好きだった。毎日雨が降ればいいと思っていた。

瓦葺き職人だった父の休みは、雨の日だった。晴れの日は朝早くに家を出て、暗くなるまで帰って来ない。そんな父と一緒に居られるのが、雨の日なのだ。

学校から帰った私は、お気に入りのカッパを着て父と散歩に出かけた。仕事の仕上がりを確認する父について行くのだ。歌を歌いながら父の横にくっついて歩く私に、父はいつも優しい笑顔で答えてくれた。父が葺いた屋根瓦が、雨で深く黒く光る景色はとても神秘的で、今でも鮮明に覚えている。それを見上げている満足そうな父の横顔も、忘れはしない。父は雨から町のみんなを守っていたのだ。

散歩から帰ると、父は決まって台所に立った。パートに出ている母の代わりに、夕食を作るのだ。父の料理は豪快の一言。材料は冷蔵庫の残りもの。それらをとにかく炒める。どんな料理でも味付けは同じ。塩こしょうと醤油、生姜にニンニク、ごま油。そして最後に全部を卵で絡める。こうして完成した今日のメニューは、父特製の『焼きめし』だ。

父は中学を卒業するとすぐに職人の道に進んだ。青春を横目に、汗と泥の海の中を必死に泳ぎ続けた。そして、親方や先輩の為に食事も作った。肉体労働にはスタミナとボリュームが重要。毎日大盛の食事で心と体を鍛え上げた。父の料理は“頑張り”の味なのだ。

「みんなのように、一緒に野球も出来ないし、遊園地にも行けなくてごめんな・・・」

焼きめしをあてにビールを飲んでいる父が、ポツリと言った。私は首を振った。

「父さんの料理、僕大好きなんだ」

雨に濡れた瓦のように、父の焼きめしはキラキラと輝いていた。それは、私達家族を支えてくれている大切な味なのだ。私は焼きめしを、口いっぱいに頬張った。

ビールのせいか分からないが、目を赤くした父も、笑いながら焼きめしをかきこんだ。

一般の部「優秀賞」

見つけたよ

伊藤（いとう）　美智子（みちこ）（宮城県）

私の住む宮城から愛媛へ直行便の運行が決まった日、就航初日の便を迷わず予約した。

愛媛はずっと行きたかったところ。

どうしても行かねばならない場所だった。

数ヶ月前、何気無しにネットを覗いていた時、私ははっと息を飲んだ。

『息子がいる』

そこには８年前に白血病で急逝した息子にそっくりな笑顔のお地蔵さんがいた。

いつ誰が投稿したのかもわからない、かなり昔の写真。小さく書かれたお寺の名前を頼りに検索してもなかなか情報が掴めない。

もう行くしかない。

誰もが悪い冗談だと思った。

身長百八十センチ、体重百キロ。大学では応援団に入っていた底抜けに明るい息子。

彼が突然の病で二十一才の若さであっけなく死んでしまった。それを頭ではわかっていても未だに信じられずにいる。無意識に人混みの中で似た人を探していたり、知らない街でひっそり暮らしていまいかと本気で思ったり。

そんな時に見つけたお地蔵さんだった。

松山空港は大雨。

レンタカーで山あいの交互通行もできない狭い道をナビを頼りに飛ばした。

古いお寺。庫裡には人の気配もない。

『いた』

石段の上に息子が立っていた。

小さなお地蔵さんは息子が病魔から解放され百八十日ぶりに家に帰ってきた時とそっくりな穏やかで優しい顔をしていた。

『やっと見つけたよ』

傘をさしかけて、何度も何度も頭を体を手を足を撫でた。

心の荷がほんの少し軽くなった気がした。

そうか、息子は愛媛にいたのか。

また息子の愛顔に会いに来ようと思った。

高校生以下の部「知事賞」

憧れの存在

村井（むらい）　珠夏（しゅか）（愛媛県　高校生）

「いっぱい努力して造船業に就きたい」

八年前の冬、将来の夢をステージで発表した。寒さと緊張で震えていたけど堂々と言った。

造船に興味を持ったのは母の影響だ。幼い頃からずっと溶接をしている母に憧れていた。母に初めて夢を相談した時、女性は少ないし安全とは言い難い仕事だと教えてくれた。そして時間はまだまだあるし、ゆっくり考えろと言われた。どうやら母は私が本気で言っていることに気付いていなかったようだ。

高校は造船の知識や技術が身に付けられる工業高校に入学した。専門的なことを学んだり実習をしたりするのはとても楽しい。ある日、工場見学で実際に現場で活躍している職人さんを見た。やりがいを感じる瞬間を聞いてみると進水式で船が初めて海に浮かぶ瞬間だと言っていた。私もこの感情を味わいたいと思い造船に対する思いがさらに燃えた。

夢に向かって頑張る高校生としていくつかの取材を受けた。頑張ったことは勉強と部活と資格取得だ。資格取得は独学のため毎日深夜まで勉強して無事一発合格できた。夢を実現させるためにどんな事にも全力を注ぐと決めている。インタビューでは、造船に興味を持ったきっかけと母の好きな所を聞かれた。五人のスタッフの後ろで母が見守る中、少し照れくさいけど母の自慢をした。チラリと母の方に目線を遣ると袖を顔に当てていてよく顔が見えなかった。全ての質問に答え終わり、次は母の番だ。私の夢についてどう思うかを聞かれていた。母は「本気でこの仕事をしたいと言っていて驚いたけど、頑張っている姿を見て応援したくなった」と答えた。初めて母の思いを知った私はこれからも努力し続けて母を越す勢いで頑張ろうと、大粒の少し温かい涙を拭いながら決心した。

母の子供に生まれてこられたこの奇跡。そして、女手一つでここまで私を育ててくれた母には感謝しかない。お母さん、いつもありがとう。

高校生以下の部「特別賞」

愛顔の波紋

岡田（おかだ）　若子（わかこ）（愛媛県　高校生）

私には六歳離れた兄がいる。兄はダウン症と先天性心疾患があり、これまでに沢山の大手術を乗り越えている。「ダウン症は天使」と言われるとおり、心穏やかで透き通った心の持ち主だと思う。しかしいつしか私は、その優しく輝く満面の笑みの影を探すようになった。

私はこれまで、兄の事を不憫に思うと同時に自分を責める時が多々あった。私が学校や習い事で沢山の賞状を手にした時、兄の体には沢山の傷痕が刻まれた。私がパスポートを手にした時、兄はドクターストップをかけられていた。又、兄が先に始めた習い事の試験も、部活等で欠席が多かった私が先に合格した。

―私は兄の分まで奪っているのではないか―

瞳の輝きが羨望の様に感じ、「若ちゃん凄いね、おめでとう。」と言う兄の言葉を聞き入れたくない時さえあった。

そんな、心が晴れない日が何年も続いていた時、兄が私のステージ発表を観る為学校に来た。兄は元々私と一緒にダンスを習っていたが、手術後大好きなダンスが禁止された。ステージ発表本番、私は溢れる拍手と熱気に充足感を得た。私の帰宅を待っていてくれた兄が飛び出してきて、「若ちゃん凄かったぁ。心がウキウキした。」と、体を揺らして言った。母が「若ちゃんが楽しそうで嬉しそうな顔が好きなんだね。」と言った。そこには、愛顔で私の顔を覗き込む兄がいた。

他者の喜びも自分の喜びであり、多くの人から頼りにされている兄を見て、私の心配が杞憂であった事が分かった。家族、旧友、同僚、恩師…沢山の人に恵まれ、目標へ向かって輝く瞳は一点の曇りもない。私が私らしく輝く姿が好きだと言ってくれる兄。気付けば私も兄の愛顔に幸せを感じている。他者の喜びも自分の幸せになる、愛がそこにある。その愛の輪が広がって、いつでもどこでもみんなが愛顔でいられますように…。

高校生以下の部「優秀賞」

妹の思いやり

渡邉（わたなべ）　澪羽（みおう）（愛媛県　高校生）

その光景を見たとき、自分を含め周りの大人が驚き、衝撃を受けた。

私には五歳離れた妹がいる。その妹が幼稚園に通っていた五歳のときの話である。

その年の秋、毎年恒例の運動会が開かれた。それを今年も、私は家族で見に行った。そのとき小学五年生だった私は「幼稚園の運動会なんてつまらないんだろうな。」と勝手に思っていた。妹があんなことをするまでは。

「パン！パン！」

銃声が響き、音楽が鳴った。運動会が始まる合図だ。最初は、園児がグラウンドに入場し、体操をした後、競技が始まった。

皆がかけっこをしていたときである。どの子も速い。どんどん妹の順番が迫ってくる。これまで妹は、一位になったことはなく、去年も一昨年も最下位だったので、もう少し頑張って上位を目指して欲しいと思った。

「よーい、ドン！」

妹のいる列が一斉に走り出した。やはり妹は遅く、後ろの子にどんどん抜かれていく。気がつけば、もう最下位になっていた。前の人との距離がだんだん開いていく。私はそれを見て、「今年も無理かな。」と最下位を確信していたときだった。

「痛っ！」

一つ前の子がコーナーでこけてしまった。皆が心配しているなか、私は「抜け！」と妹に必死で叫んだ。そのときなんと、妹はその子に手を出して助けたのである。

その光景を見たとき、自分を含め周りの大人が驚き、衝撃を受けた。

結果は結局最下位だった。私は運動会が終わったとき、なぜ助けたのか聞くと、五歳とは思えない答えが返ってきた。

「だってあの子は私の友達だもん。こけたら助けるのが当たり前でしょ。」

それは私の自慢の妹だ。

高校生以下の部「優秀賞」

願いの横断幕

土井（どい）　倫太郎（りんたろう）（愛媛県　中学生）

僕の祖母は、二年前に腹膜播種というお腹に癌が散らばっている病気になりました。癌の中でもステージ４という最も治癒率の低いもので、転移もあちこちにありました。

考える暇もなく抗癌剤治療が始まり、祖母は髪の毛だけでなく眉毛、まつ毛も抜け落ち、指先は変色して痺れ、強烈な吐き気に襲われました。しかし治療は待ってくれません。油断すると癌細胞が再び動き出してしまうからです。あっという間に手術の日が決まり、子宮、卵巣、直腸、大腸の一部を全部取るという大手術になると聞きました。

しかし、この頃祖母は気力も体力も限界がきていました。声をかけたくても励ましたくても、コロナ禍で僕達が病院に入ることはできません。このままではいけないと感じた僕はいとこと相談してある作戦を決行しました。僕を入れた六人のいとこと一緒に横断幕を作ったのです。祖母の病室は十二階で、少しくらいの大きさの文字では見えません。一文字を畳一畳くらいの大きさにしてみんなで絵の具まみれになりながら、大きな大きな横断幕を作りました。

手術の前日、祖母に「窓の外を見て。」と電話をし、電話をつないだまま外を見てもらいました。祖母が泣き崩れたのが分かりました。祖母が見たのは、色とりどりの「がんばれ」の文字と笑顔で飛び跳ね手を振る僕達でした。

あの日から一年。祖母は好きなものを食べ、好きな所に出掛け、闘病前と変わらない生活をしています。

今の状態まで回復したのは、お医者さんや看護師さんなどたくさんの人々の力があったからです。でも僕は知っています。目に見えない生きるパワーを与え、闘う力を与えたのは僕達だということを。願う心は奇跡をおこすということを。

夏休み、祖母は僕達とおいしいケーキが食べたいそうです。仕方なく付き合ってやるかな。

高校生以下の部「優秀賞」

母の分身

宮本（みやもと）　弥怜（みれい）（愛媛県　高校生）

もこもことした髪の毛に、まあるい輪郭の顔。面白おかしい表情をしたり、ポーズをとってみせたりする。

ちょっとしたメッセージとともに、紙の隅のほうにいる母の分身。私が幼い頃から、母はいつも楽しそうにそれを描いていた。「洗濯物畳んどって」との伝言メモには、口笛を吹きながら山のような洗濯物を畳む分身、「お菓子あるけん食べさいや」とのメモには、口いっぱいにクッキーを頬張る分身がいた。その微笑ましさたるや、見ているこちらまで笑顔になってしまうほどだ。

中でも、印象深かった分身がいた。私の祖母が骨折をして入院していた頃のことだ。祖母の見舞いのため、母は帰りが遅くなることが多く、学校から帰ると家には私ひとりきりだった。祖母の容態や母の帰りが心配だった上、外も暗く、しんと静まった家にいるのはかなり不安だった。そんなある日、台所のテーブルの上に、一枚の紙が置いてあるのを見つけた。「お見舞いで遅くなるよ」と書かれた横には、やはり母の分身がいた。彼女のだけではなかった。私と祖母の分身もいたのだ。楽しそうに笑い合い、食卓を囲む分身たちの姿を見ると、思わず顔がほころんだ。つい先程まで張り詰めていた空気が穏やかに溶け出し、私を包むのを感じた。

「ああ、大丈夫だ。」

と自然と思えた。その後、祖母は無事に退院することができた。母特製の蒸しパンを味わいながら、おいしいね、幸せやね、と皆で言い合った。母は私と目が合うと、にかっと笑っていた。あのときの分身たちの姿は、現実のものとなったのだった。

「自分のペースで頑張りなさいや。応援しとるよ」。勉強机に置かれたメモから、にこやかに私を見守る母の分身。「ありがとう。頑張るよ」。その横に、そっと私の分身を描いておいた。